

## 石油ストーブ・石油ファンヒーターの事故、5年間で57人死亡 ～給油時は、細心の注意を払いましょう～

気温が下がり、ストーブなどの暖房器具<sup>※1</sup>を使用する機会が増えてきています。NITEでは、これら暖房器具の事故の多くが火災に至り、死亡や重傷につながることから注意喚起します。

2014年度から2018年度の5年間にNITE(ナイト)に通知のあった製品事故情報<sup>※2</sup>では、暖房器具の事故は合計965件<sup>※3</sup>ありました。そのうち火災事故が75%(726件)を占めています。これらの事故は、10月から増え始め1月にピークを迎えます。

人的被害の発生状況を見ると、死亡事故は92件(108人)発生しています。被害者数は年代が上がるにつれて増加し、死亡事故では60歳以上が73%(79人)を占めています。

製品別の発生状況を見ると、石油ストーブ・石油ファンヒーターは95%(337件中321件)が火災になっており、他の製品より火災の発生割合が高くなっています。そのうち、35%(119件)が全焼になっています。また人的被害は、108件と暖房器具の中で最も多く発生し、死亡事故は50件(57人)となっています。

特に、人的被害の多かった石油ストーブ・石油ファンヒーターの事例を紹介します。

死亡事故では、ストーブへの給油時に灯油がこぼれて火災になったり、間違えて給油したガソリンに引火したり、使用中に可燃物が接触して発火する事故が発生しています。

石油ストーブ・石油ファンヒーターによる住宅の全焼や死亡事故の多くは、使い方が原因で発生しています。

空気が乾燥して火災になりやすい冬場を迎えている中、以下のポイントに注意し、石油ストーブ・石油ファンヒーターの事故を未然に防ぎましょう。



灯油がこぼれて引火

### ■石油ストーブ・石油ファンヒーターの事故を防ぐポイント

- 給油する前に必ず消火する。給油後は、給油口キャップをしっかりと締め、灯油が漏れないことを確認してから本体にセットする。
- 灯油は灯油用ポリエチレンかん(以下、「ポリタンク」という。)などの専用容器に入れ、ガソリンと別の場所で保管する、ラベル表示で区別するなど、誤給油を防ぐための対策を徹底する。
- 周囲に可燃物などを置かない。特に衣類などを乾かさない。
- 就寝する前に必ず消火し、完全に消えたことを確認する。

(※1) 本資料で対象とする製品は次ページを参照。

(※2) 消費生活用製品安全法に基づき報告された重大製品事故に加え、事故情報収集制度により収集された非重大製品事故やヒヤリハット情報(被害なし)を含める。

(※3) 重複、対象外情報を除いた事故発生件数。

## 対象製品※4 および製品分類

### 電気ストーブ・電気ファンヒーター

#### 電気ストーブ※5

カーボンヒーター



オイルヒーター

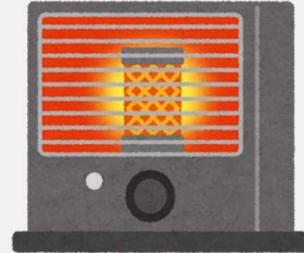


#### 電気ファンヒーター

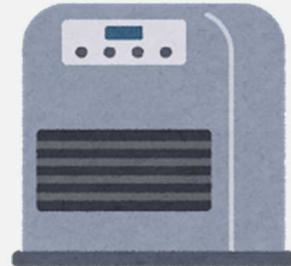


### 石油ストーブ・石油ファンヒーター

#### 石油ストーブ

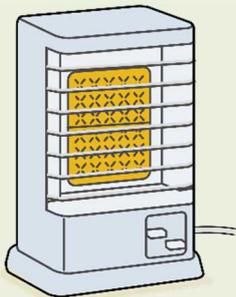


#### 石油ファンヒーター

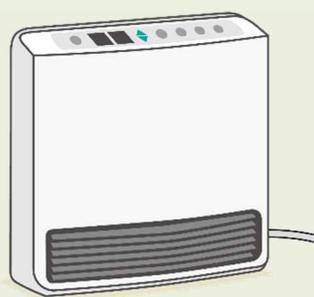


### ガスストーブ・ガスファンヒーター

#### ガスストーブ※6

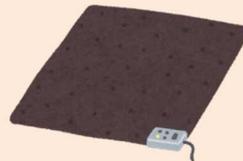


#### ガスファンヒーター



### その他暖房器具

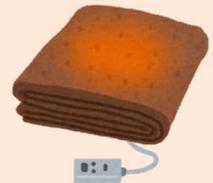
#### 電気マット・カーペット



こたつ



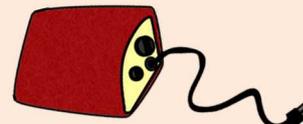
#### 電気毛布



#### 電気式床暖房



#### 電気あんか



上記以外の暖房器具

(※4) エアコンは夏場に事故が多いため、本件からは除外しています。

(※5) 記載例以外にシーズヒーター、ハロゲンヒーター、パネルヒーターなども含む。

(※6) カセットボンベ式ガスストーブも含む。

## 1. 暖房器具の事故の発生状況

### 1.1 月別の事故発生状況

2014年度から2018年度までの暖房器具の事故965件について、図1に「月別の火災発生状況」を示します。火災事故は、事故全体の75%（726件）を占めています。また、10月から3月までの間に全体の90%（866件）の事故が発生しています。

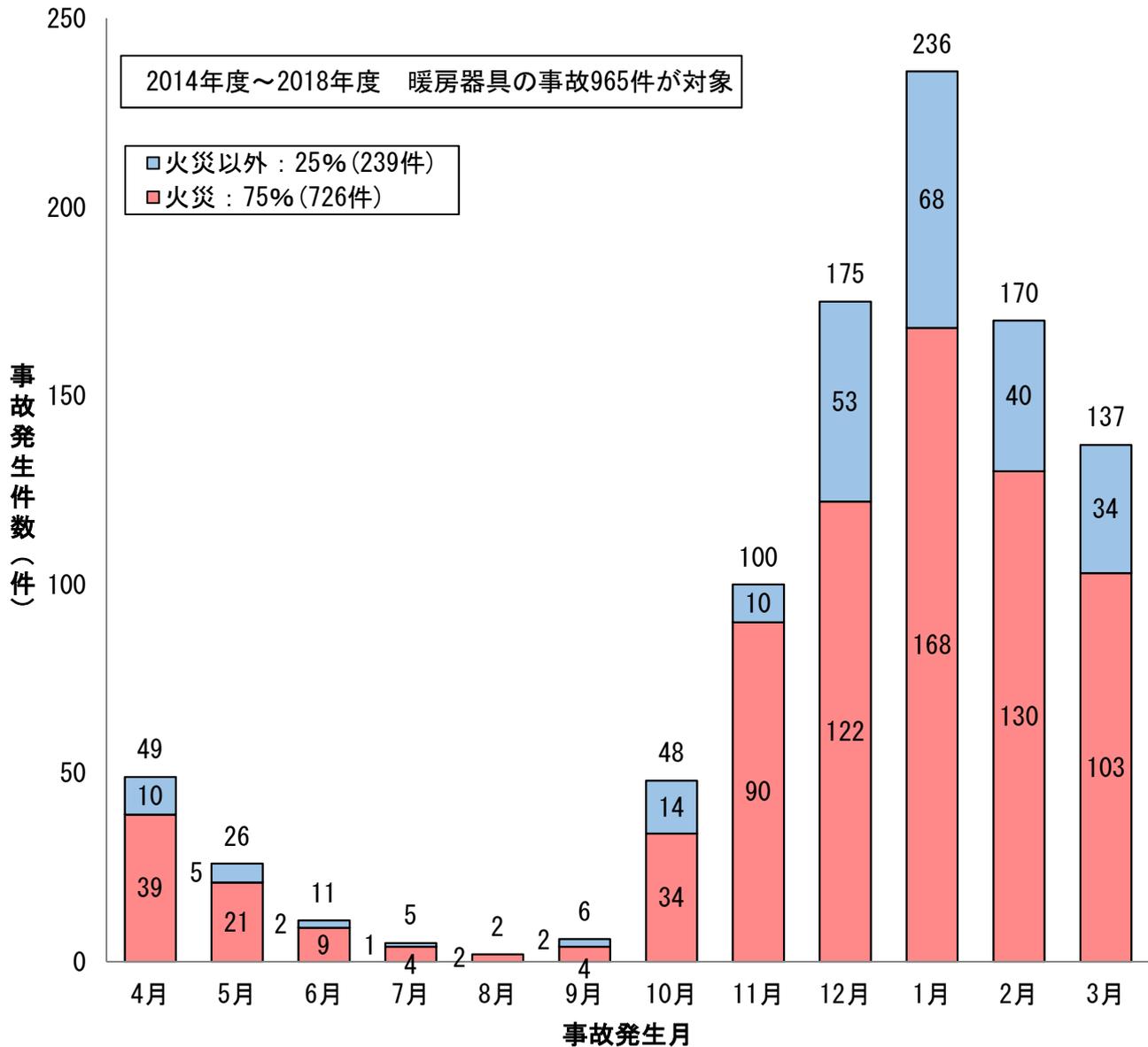


図1 月別の火災発生状況

## 1.2 被害状況

2014年度から2018年度までの暖房器具の事故965件について、図2に「被害状況」を示します。人的被害は、236件（319人）発生しています。死亡が92件（108人）、重傷が38件（54人）、軽傷が106件（157人）発生しています。

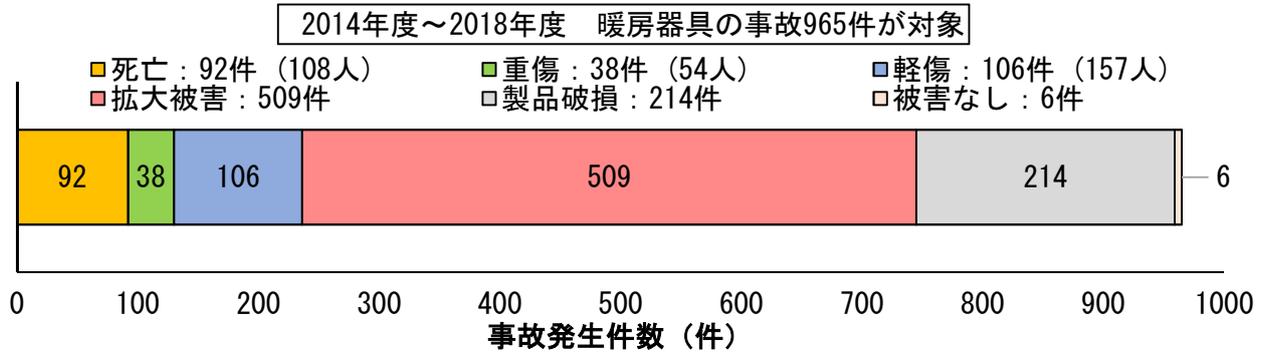


図2 被害状況

## 1.3 年代ごとの人的被害発生状況

2014年度から2018年度までの暖房器具の人的被害が生じた事故の被害者319人のうち、年齢が判明した242人について、図3に「年代別の人的被害者数」を示します。死亡者数は、60歳以上が全体<sup>※7</sup>の73%（79人）を占め、年代が上がるにつれて増加しています。そのうち、80歳以上は全体<sup>※7</sup>の41%（44人）を占めています。

（※7） 年齢が不明な死亡者も含んだ108人が対象

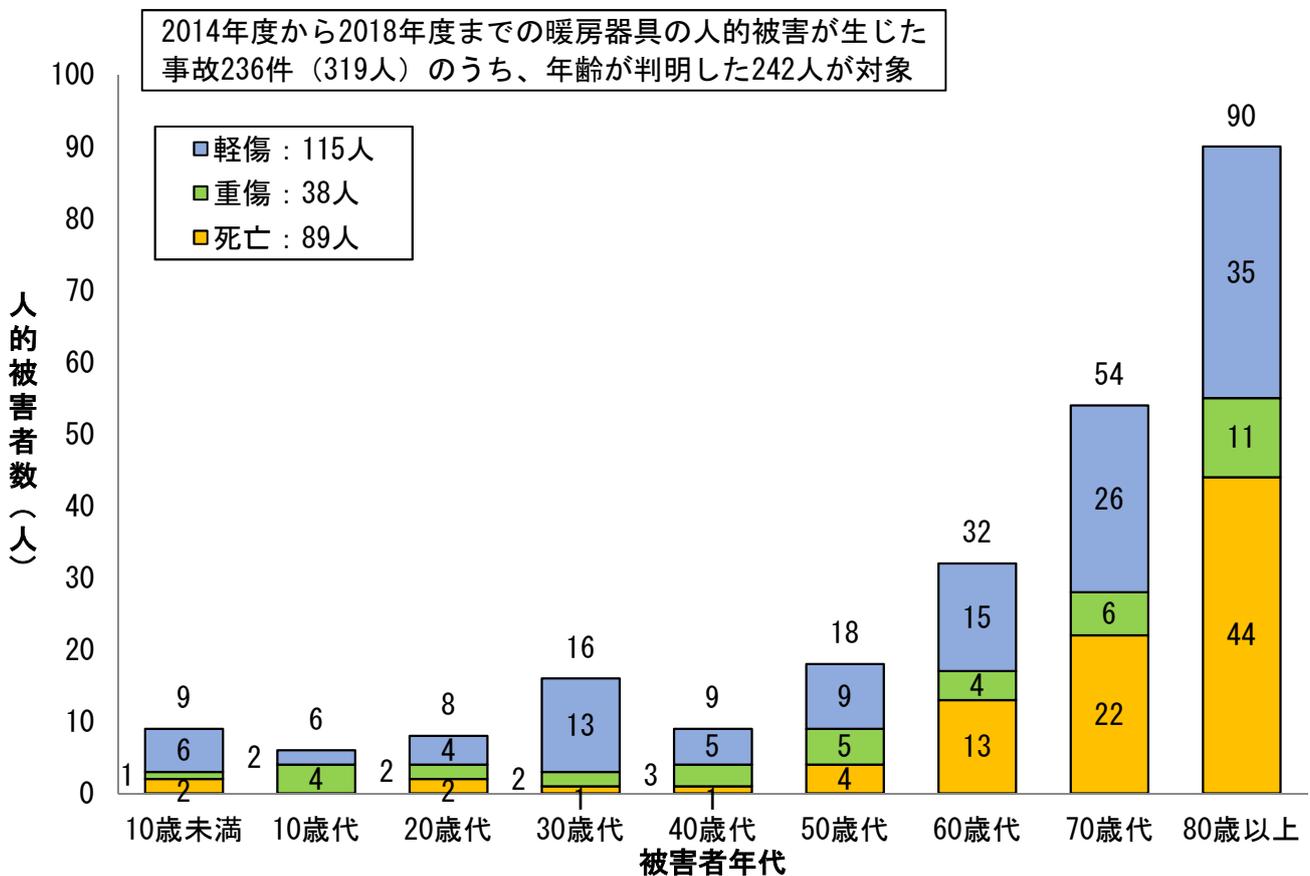


図3 年代別の人的被害者数<sup>※8</sup>

（※8） 年齢が不明な死亡19人、重傷16人、軽傷42人を除く

## 1.4 製品別の事故発生状況

2014年度から2018年度までの暖房器具の事故965件について、図4に「製品分類別の火災発生状況」を示します。石油ストーブ・石油ファンヒーターは95%(337件中321件)が火災になっており、他の製品より火災の発生割合が高くなっています。また、35%(119件)が全焼になっています。

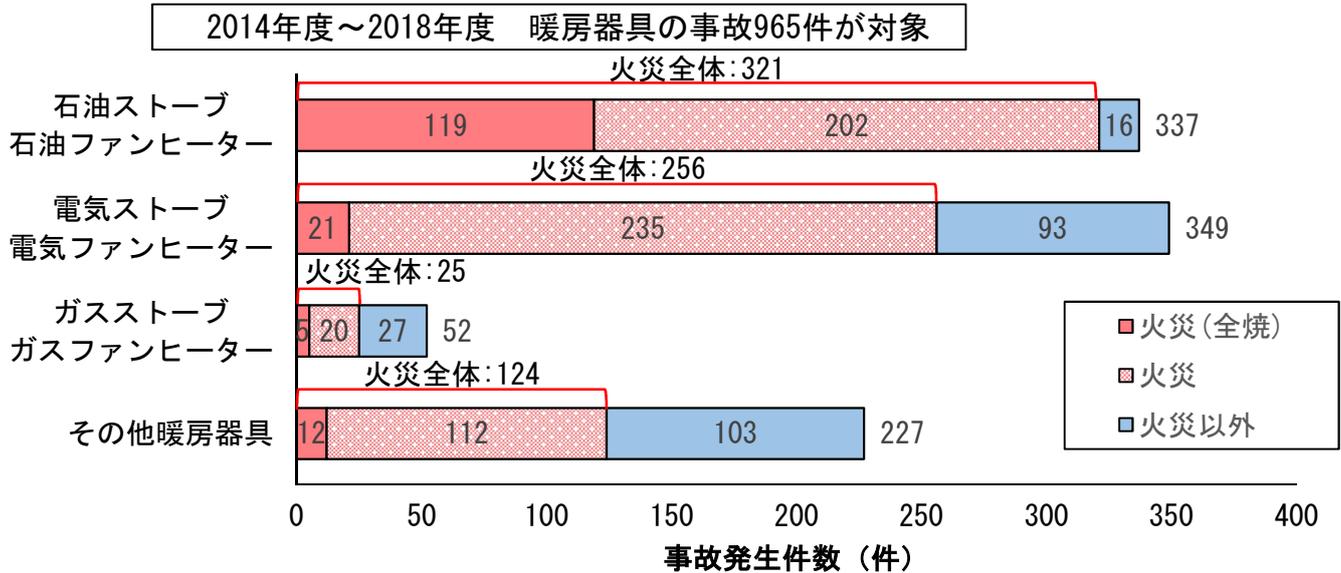


図4 製品分類別の火災発生状況

2014年度から2018年度までの暖房器具の事故965件のうち、人的被害(死亡、重傷、軽傷)の生じた事故236件(319人)について、図5に「製品分類別の人的被害状況」を示します。石油ストーブ・石油ファンヒーターで最も多く人的被害が発生しています。石油ストーブ・石油ファンヒーターは、他の暖房器具と比べ火の回りが早いいため全焼になることが多く、その際に逃げ遅れるなどして、人的被害が多く発生していると考えられます。

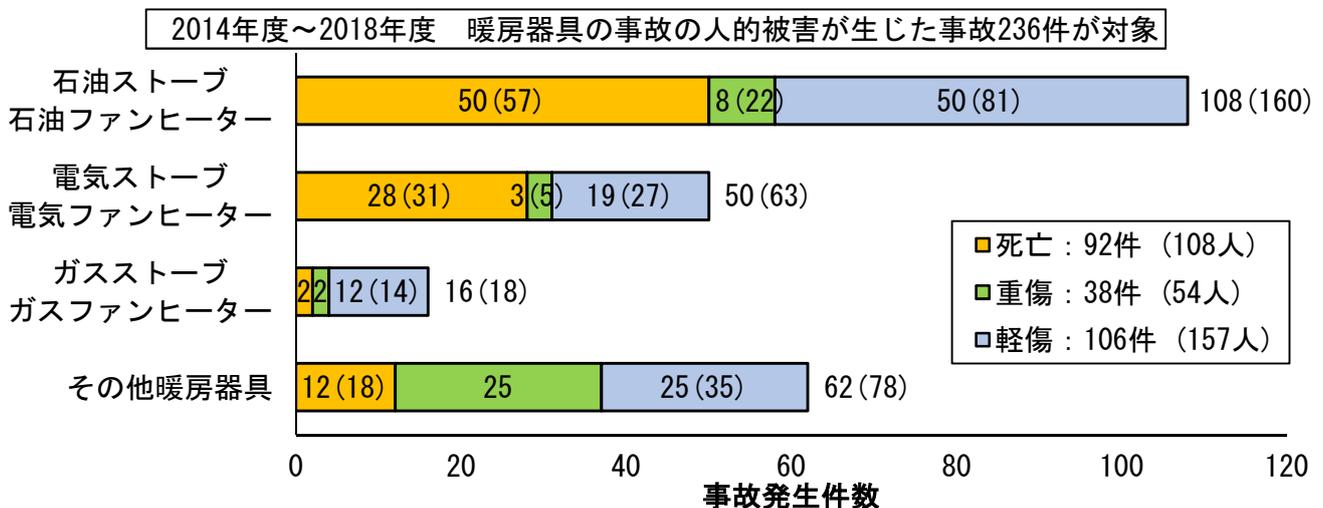


図5 製品分類別の人的被害状況<sup>※9</sup>

(※9) ( ) は被害者数。( ) のないものは事故件数と被害者人数が同数のもの

## 2. 石油ストーブ・石油ファンヒーターの事故の発生状況

石油ストーブ・石油ファンヒーターの事故発生状況について、以下に示します。

### 2.1 事故原因ごとの被害状況

2014年度から2018年度までの石油ストーブ・石油ファンヒーターの人的被害が生じた事故108件の事故原因について、表1に「事故原因ごとの被害状況」を示します。

事故原因が判明したものをみると、使い方による事故<sup>※10</sup>でした。給油口キャップの閉め忘れ及び締め付け不良によって引火した事故が最も多く、次いでガソリンの誤給油の事故、可燃物が接触して発火した事故が多く発生しています。

給油口キャップの閉め忘れ及び締め付け不良による事故や、ガソリンの誤給油の事故の多くは、高齢者のみの世帯で発生しています。高齢者の事故の防止には、使用者の注意には限界があるため、家族や周囲の方々の注意や使い方への理解も重要です。

可燃物が接触した事故の多くは、使用中にその場を離れたり、就寝中に発生しています。

表1 事故原因ごとの被害状況

事故原因	死亡	重傷	軽傷	計	
給油口キャップの閉め忘れ及び締め付け不良による引火	10		12	22	
	(10)	(3) <sup>※11</sup>	(14)	(27)	
ガソリンの誤給油により出火	6		10	16	
	(7)	(3) <sup>※11</sup>	(15)	(25)	
可燃物が接触（着衣着火したものも含む）又は放射熱で過熱	6	2	3	11	
	(7)	(2)	(12)	(21)	
燃焼筒の取付・組合せ不良で異常燃焼など	3		2	5	
	(5)		(3)	(8)	
故障品を使用	1	1	1	3	
	(1)	(2)	(5)	(8)	
その他		1	4	5	
		(1)	(6)	(7)	
小計	事故件数	26	4	32	62
	被害者数	(30)	(11)	(55)	(96)
不明		24	4	18	46
		(27)	(11)	(26)	(64)
計	事故件数	50	8	50	108
	被害者数	(57)	(22)	(81)	(160)

(※10) 誤った使用及び誤った使用が疑われる事故。

(※11) 同一の事故で使用者（死亡）とは別に重傷を負った人の数

### 3. 石油ストーブ・石油ファンヒーターの事故事例

#### 3.1 灯油がこぼれて引火

事故発生年月日 2016年2月（大分県、70歳代・男性、死亡）

##### 【事故の内容】

使用中の石油ストーブから出火し、住宅1棟を全焼、隣接する建物8棟を焼損し、1人が死亡、1人が重傷を負った。

##### 【事故の原因】

使用者がカートリッジタンクに給油後、給油口キャップを斜め締めにしていたため石油ストーブへ戻す際に灯油がこぼれ、拭き取りが不十分な状態で点火したためこぼれた灯油に引火し、燃え広がったものと考えられる。

なお、取扱説明書に「こぼれた灯油はよく拭き取る。給油口キャップは確実に閉め、給油口キャップを下にして油漏れがないことを確認する」旨、記載されている。



#### 3.2 ガソリンの誤給油

事故発生年月日 2017年11月（兵庫県、80歳以上・男性、死亡）

##### 【事故の内容】

石油ファンヒーター及び建物を全焼する火災が発生し、1人が死亡した。

##### 【事故の原因】

焼損した石油ファンヒーター周辺よりガソリン成分が検出されたことから、使用者が誤ってガソリンを給油し、気化したガソリンに引火したものと考えられる。

なお、取扱説明書及び本体には、「ガソリン使用禁止」旨、記載されている。



#### 3.3 可燃物が接触

事故発生年月日 2017年11月（埼玉県、年齢・性別不明、死亡）

##### 【事故の内容】

石油ストーブを使用中、建物1棟を全焼、建物4棟を類焼する火災が発生し、1人が死亡、2人が軽傷を負った。

##### 【事故の原因】

石油ストーブのガード及び天板の裏面に繊維状の付着物が認められたことから、付近にあった衣類などに着火し、火災に至ったものと考えられる。

なお、本体及び取扱説明書には、「衣類などの乾燥には使用しない。」、取扱説明書には、「衣類などの燃えやすいもののそばでは使用しない。」旨、記載されている。



## 石油ストーブ・石油ファンヒーターの気を付けるポイント

### ○給油する前に必ず消火する。

給油後は、給油口キャップをしっかりと締め、灯油が漏れないことを確認してから本体にセットする。

給油口キャップの締め方が不十分だったなどで、灯油が漏れて引火した事例があります。給油する際は、必ず消火してからにしてください。

また、カートリッジタンクへの給油後は、給油口キャップを閉め、しっかりと締まっていることを必ず確認してから本体にセットしてください。

周囲に灯油が漏れていないことを、点火前に確認してください。

灯油がストーブにこぼれた際は、機器内部に浸入しているおそれがありますので、使用を中止し、販売事業者や製造事業者に相談してください。

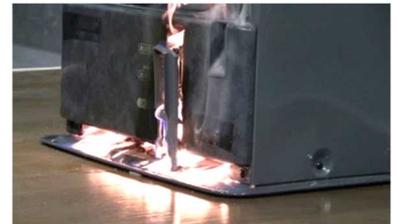
### 給油口キャップの締め方が不十分だったなどで、灯油が漏れて引火した火災の例



(写真) 消火せずに給油して、灯油が漏れ引火 (イメージ)



(写真) 消火後に燃焼筒の温度が高くなっており、灯油がかかり引火 (イメージ)



(写真) 再点火した際に、こぼれた灯油に引火 (イメージ)

### ○灯油は灯油用ポリタンクなどの専用容器に入れ、ガソリンと別の場所で保管する、ラベル表示で区別するなど、誤給油を防ぐための対策を徹底する。

ガソリンを誤って給油した場合、たとえ少量の混入であっても火災が生じるおそれがあるため、注意が必要です。

灯油とガソリンを同じ容器で保管していたことで、ガソリンが混入した灯油を給油して火災に至った事故が発生しています。灯油は灯油用ポリタンクなどの専用容器<sup>※12</sup>に入れ、ガソリンは消防法に適合した金属製のガソリン携行缶に入れて保管してください。

また、同じ場所で保管していたガソリンを誤って給油して火災に至った事故が発生しています。灯油とガソリンは、別の場所で保管する、ラベル表示で区別するなど、誤給油を防ぐための対策を徹底してください。



灯油用ポリタンク



ガソリン用携行缶



(写真) ガソリンを給油して爆発的に燃え上がる様子 (イメージ)

## ○周囲に可燃物などを置かない。特に衣類などを乾かさない。

ストーブの周囲に布団や衣類などを置いたり、カーテンの近くにストーブを置いたりすると、放射熱による過熱や高温部への接触によって、火災のおそれがあります。

ストーブの上で衣類を乾燥させると、乾燥して軽くなった衣類があおられて落下し、高温部に接触することがあります。

このような使用は絶対にしないでください。

また、衣服が炎に接しないように注意してください。衣服へ着火するおそれがあります。

## ○就寝する前に必ず消火し、完全に消えたことを確認する。

石油ストーブ・石油ファンヒーターをつけたまま就寝すると、寝具などの可燃物が高温部に触れ、可燃物に着火するおそれがあり、危険です。さらに就寝中は発見が遅れやすく、大きな火災につながるおそれがあります。就寝時の使用は絶対にしないでください。

(※12) JBA（日本ポリエチレンブロー製品工業会）推奨ラベル、KHK（危険物保安技術協会）の試験確認済証、JIS規格認証（JIS Z 1710）などの付いた容器

## 石油ストーブ・石油ファンヒーターの事故を防ぐ対応策

### ○PSCマークの付いた製品への買い換えを検討する。

石油ストーブをはじめとする石油燃焼機器は、2009年に消費生活用製品安全法の「特定製品」に指定され、2011年からはPSCマークの無い製品は販売することができなくなりました。PSCマークの付いた製品は、

- ・ 燃焼中であっても、給油時、機器からカートリッジタンクを抜いた場合90秒以内に消火する（給油時消火装置）。
- ・ 閉止音や目視又は感触などで給油口キャップが閉まっていることが確認できる。などの機能を有しています。



### お問い合わせ先

独立行政法人製品評価技術基盤機構 製品安全センター 所長 小田 泰由  
担当者 柿原、小寺

- 記者説明会当日  
電話：03-3481-6566 FAX：03-3481-1870
- 記者説明会翌日以降  
電話：06-6612-2066 FAX：06-6612-1617

### 参考データ

図1に「製品別の事故発生状況」を示します。石油ストーブ・石油ファンヒーター及び電気ストーブ・電気ファンヒーターの両者を合わせると、全体の71%（686件）を占めています。また、製品別では石油ストーブ及び電気ストーブの2製品で、全体の54%（519件）を占めています。

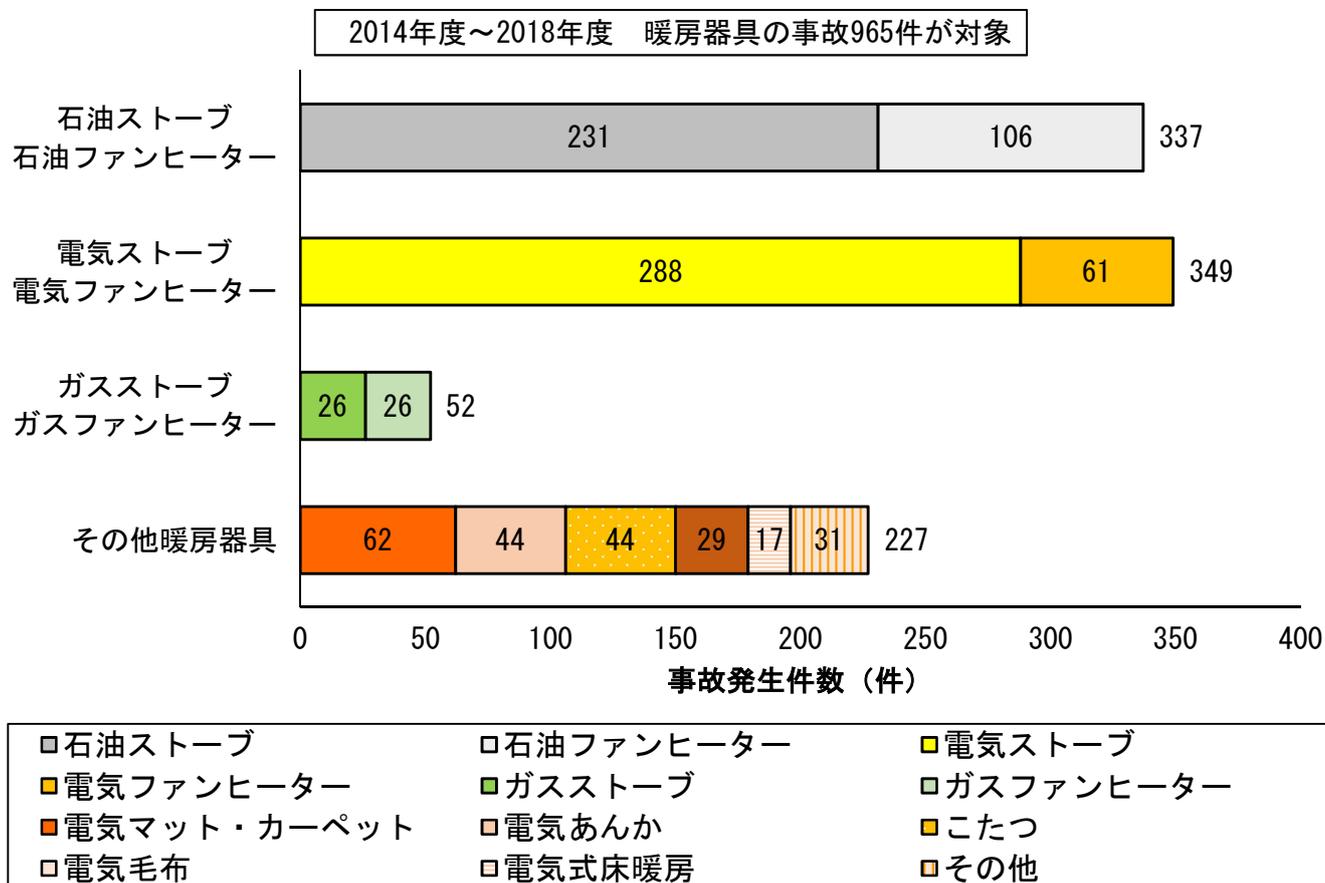


図1 製品別の事故発生状況

(別紙)

2014年度から2018年度までの石油ストーブ・石油ファンヒーターの人的被害が生じた事故108件による被害者の総数は160人です。そのうち、年齢が判明した112人について、図2に「年代別の人的被害者数」を示します。死者数は、60歳以上が全体<sup>※1</sup>の72%（41人）を占め、年代が上がるにつれて増加し、80歳以上では全体<sup>※1</sup>の33%（19人）を占めています。

(※1) 年齢が不明な死亡者も含んだ57人が対象

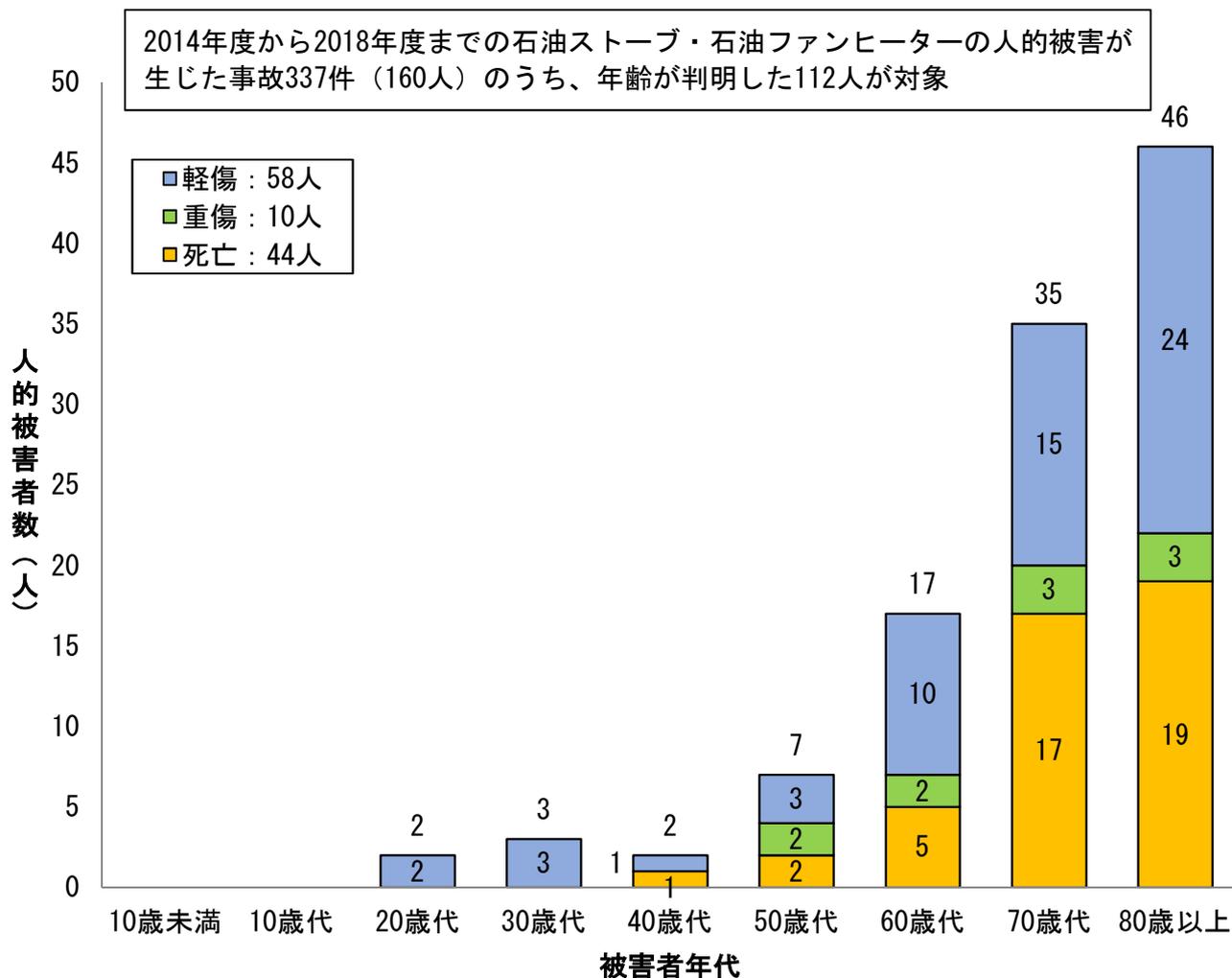


図2 石油ストーブ・石油ファンヒーターの年代別の人的被害者数<sup>※2</sup>

(※2) 年齢が不明な死亡13人、重傷12人、輕傷23人を除く

## 電気ストーブ・電気ファンヒーターの事故

電気ストーブ・電気ファンヒーターの使い方による事故では、電源コードの断線や可燃物が接触して発火した事故が多く発生しています。以下のポイントを踏まえて、事故を未然に防ぎましょう。

### 電気ストーブ・電気ファンヒーターの気を付けるポイント

#### ○電源コードを引っ張らない、折り曲げない。

電源プラグと電源コードの付け根（コードプロテクター）で電源コードが断線し、スパークが発生し火災に至っています。電源プラグをコンセントに差し込んだまま製品を移動させないでください。また、抜く際は電源プラグを持って抜いてください。同様に、保管時に電源コードを本体にきつく巻き付けしないでください。いずれの場合も電源コードに大きな力が加わり、断線するおそれがあります。

#### ○使用しない時、外出時などには電源スイッチを切り、電源プラグを抜く。

部屋を暖めようとするなどして使用中にその場を離れている間に、可燃物が接触して火災が発生した事故があります。発見が遅れ、製品のみならず周辺を焼損する事態に至る可能性が高いため、外出や使用しない時は電源スイッチを切り、電源プラグを抜いてください。

#### ○周囲に可燃物などを置かない。特に衣類などを乾かさない。

ストーブの周囲に布団や衣類などを置いたり、カーテンの近くにストーブを置いたりすると、放射熱による過熱や高温部への接触によって、火災のおそれがあります。

このような使用は絶対にしないでください。

また、衣服が炎に接しないように注意してください。衣服へ着火するおそれがあります。



(写真) 電気ストーブに衣類が接触して発火する様子 (イメージ)

#### ○就寝する前に必ず消火し、完全に消えたことを確認する。

ストーブをつけたまま就寝すると、寝具などの可燃物が高温部に触れ、可燃物に着火するおそれがあり、危険です。さらに就寝中は発見が遅れやすく、大きな火災につながるおそれがあります。就寝時の使用は絶対にしないでください。

(写真) 電気ストーブに布団が接触して過熱される様子 (イメージ)



## ガスストーブ・ガスファンヒーターの事故

ガスストーブ・ガスファンヒーターでは、ガスホースや接続具の取付が悪く漏れたガスに引火した事故が多く発生しています。以下のポイントを踏まえて、事故を未然に防ぎましょう。

### ガスストーブ・ガスファンヒーターの気をつけるポイント

○ガス臭がしたりガス漏れの音が聞こえたりした場合は、**点火せずガス供給元（ガス栓やカセットボンベ）とガスストーブ・ガスファンヒーターが正しく接続されているか確認する。**

ガス栓やガスストーブ・ガスファンヒーターとガス接続具の隙間からガスが漏れて引火した火災も発生しています。ガスストーブ・ガスファンヒーターを使用するときは、適切なガス接続具で正しく接続されていることを確認してからガス栓を開いてください。

(参考) ガス栓とガスストーブ・ガスファンヒーターの接続について※<sup>3</sup>

- ガス接続具は、「ガス用ゴム管」ではなく、必ず「ガスコード」を使用してください。ガスストーブ・ガスファンヒーターの接続口は「スリムプラグ型」になっており、ガス用ゴム管は接続できません。誤ってガス用ゴム管を使用して、接続部からガスが漏れ事故に至っていますので、注意が必要です。



ホースエンド型  
ガス栓



ガス専用プラグ



コンセント型ガス栓



ガスコード



不十分な接続



スリムプラグ型



禁止



ガス用ゴム管

- ガス栓の周囲に障害物があるときは、接続部やガスコードに無理な力がかからないよう、右図のようなソケット部が自在型のガスコードを使用してください。ガスコードに無理な力がかかると接続が不完全になったり、破損してガス漏れの原因になります。



自在型ソケット

- 接続する前にソケットとプラグにごみなどが付着していないかを確認してください。ごみなどをかみ込みますとガス漏れ、火災の原因となりますのでご使用前には必ずご確認ください。
- ガスコードは適切な長さのものを使用してください。長すぎると機器の高温部に接触したり、配線時に無理な力がかかったりして破損し、ガス漏れの原因になります。
- ガスコード・ガス用ゴム管は時間とともに劣化します。7年程度を目安に新しいものと取り替えてください。

(※<sup>3</sup>) 一般社団法人日本ガス石油機器工業会ホームページより抜粋

[http://www.jgka.or.jp/gasusekiyu\\_riyou/anzen/gasu\\_gassen/index.html](http://www.jgka.or.jp/gasusekiyu_riyou/anzen/gasu_gassen/index.html)

## リコール製品の事故

2014年度から2018年度までの暖房器具の事故965件について、図3に「製品分類別 リコール対象製品の事故発生状況」を示します。リコール対象製品の事故は、電気ストーブ・電気ファンヒーターで最も多く発生しています。

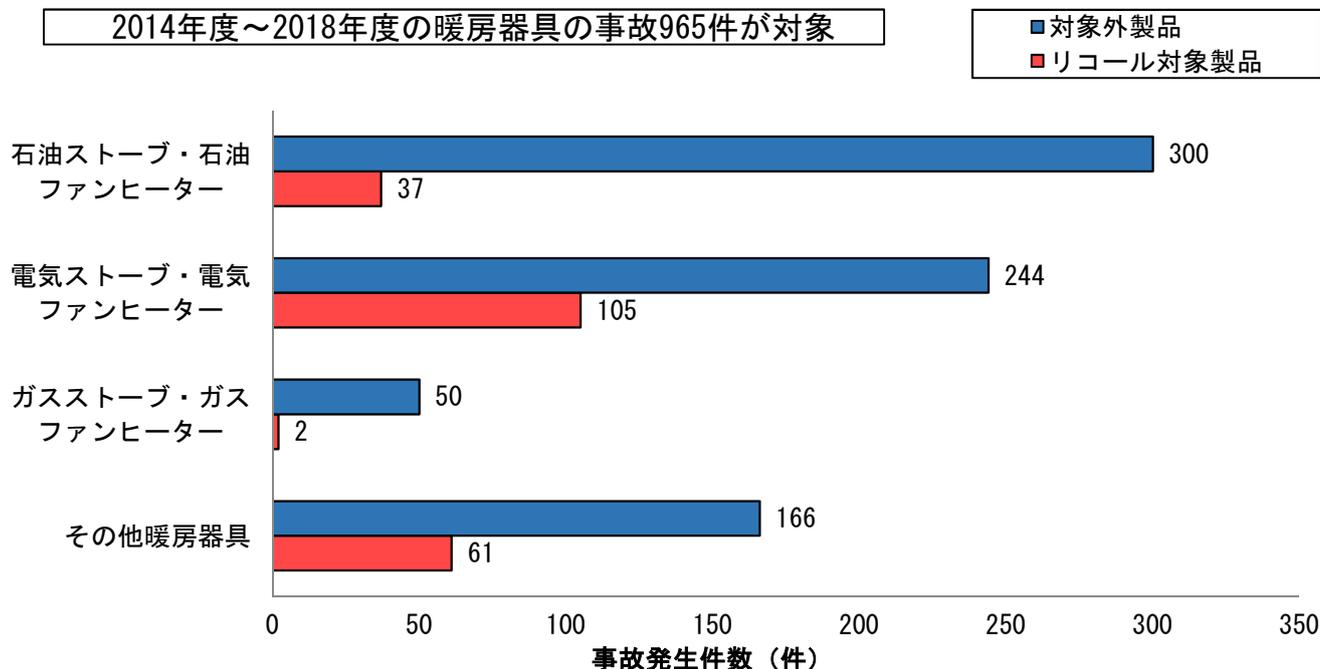


図3 製品分類別 リコール対象製品の事故発生状況

### リコール製品の事故を防ぐ

#### ○最新のリコール情報を入手する

事業者、消費者庁、経済産業省及びNITEなどはホームページでリコール情報を掲載しています。お持ちの製品がリコール製品かどうかを確認することが可能です。

製品が発売されてから数年後にリコールを実施したという事例や、型式などに限定せず、長期間使用していることを注意喚起している製品などもあります。

また、使用しなくなり、保管されていた製品がリコール製品だった事例もあるため、併せて注意が必要です。

消費者庁のリコール情報サイトにおいて、最新のリコール情報や、キーワードによるリコール情報の検索を行うことができます。

また、「リコール情報メールサービス」に登録することでリコール情報が提供されます。



<https://www.recall.caa.go.jp/index.php>

